

「子ろばに乗る王」

(マルコによる福音書 11:1-11)

教会の暦は最後の主日を迎えました。今日は「王なるキリストの主日」と言われます。王なるキリストの主日は、1925年にローマ・カトリック教会の教皇ピオ 11 世が定めたものです。ヒトラー、ムッソリーニ、スターリンが独裁体制を固めていった時代の中で、世の終わりは滅びの時ではなく、神の国の完成の時、救いの時であり、まことの王なるキリストこそがそれをもたらすのだ、とこの主日を祝ったのです。

主イエスは言いました。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。」主イエスはこの子ろばに乗って、エルサレムに入城しました。王なるキリスト。この王のもたらす平和は、独裁者たちのように戦車や軍馬によってではなく、「子ろば」によってもたらされるのです。子ろばは乗り心地が悪く、決して立派ではありません。しかし、主イエスはその子ろばをこそ見つけ、選ばれます。

主イエスが関わった人々、弟子たちはこの子ろばのように、「立派な」者たちではありませんでした。しかし、主イエスは、そのような者たちを見つけ、弟子とされました。サラブレッドは立派です。しかし一方で、プライドが高く、機嫌が悪いと暴れたり、乗りこなすのが難しいとされています。主イエスが求めるのはそのような者ではなく、主イエスの声に聴き従い、主イエスを背中に乗せ、歩む者です。

わたしたちの生きる世界は、サラブレッドを求めます。その象徴として、独裁者たちはサラブレッドに乗って征服した土地へと入城します。しかしそこにまことの平和は訪れません。威厳も無い、小さな命、子ろばに乗って平和は訪れます。ですから、わたしたちはサラブレッドになろうとするのではなく、子ろばになりましょう。そして、主イエスを背中にお乗せする喜びに気づき、この世で生きていきましょう。

いよいよ来週から新しい暦です。わたしは子ろばでいられているだろうかと振り返りつつ、新しい暦へと歩んで参りましょう。